

# 6割超 介護に不安

## 高齢者

## 子ども世代

### 県内200人ネット調査

県内の65歳以上の高齢者とその子ども世代の6割超が自分や親の介護に不安や危機感を持っていることが、製薬会社フ

費用のあて、予防策…

## 意思疎通不足も

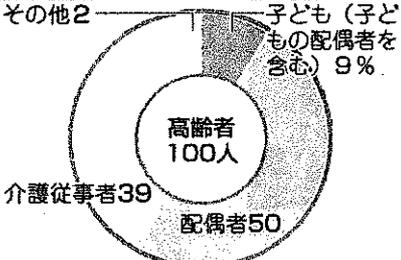
アイザーの調査で分かった。高齢者のうち自分の介護について子どもと話をしたことがある人は22・0%にとどまっております。家族のコミュニケーション不足もつかがえる。  
(西協和宏)

調査は、全国の65歳以上の親世代の高齢者4700人と、その子ども世代4700人の計9400人を対象に、インターネットで昨年9〜10月に行われた。福井県内は高齢者、子ども世代それぞれ男女100人が答えた。  
県内では、高齢者の64人が「自分の介護に不安や危機感を持っている」と答え、割合は全国平均(50・4%)を大きく上回り、47都道府県で最も高かった。自分の親の介護に対する不安や危機感を感じている子ども世代は65人で、全国平均(70・9%)を下回ったものの、高齢者自身と同

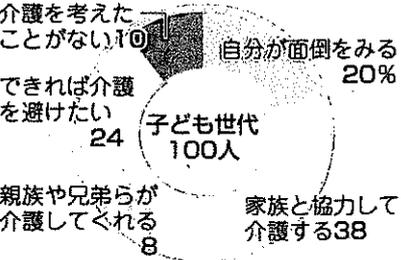
様に高い割合になった。高齢者のうち、自分が要介護状態になった場合に誰にどこで介護してほしいかや年金収入、貯金といった介護費

用のあてなど具体的な話をした経験があるのは22人だった。誰の世話に？

誰の介護を受けたいか



誰の介護を誰が担うか



福井県内分介護アンケート結果(ファイザー調べ)

た。子ども世代で自分の親に何らかの介護予防策を伝えた経験があるのは41人だった。

子ども世代の不安、危機感の内容を複数回答で聞くと、「お金がどの程度必要か分からない」69・2%、「仕事、家事、育児と両立できるかが分からない」61・5%が多く、いつまで介護が続くか分からないも46・2%が挙げた。

県立大看護福祉学部の奥西栄介教授(高齢者福祉)は「身

## 配偶者、専門職望む声

アンケートでは高齢者に誰に介護してほしいかを尋ねたところ、半数が配偶者と答えた。介護の専門職が39人で続き、子どもやその配偶者を望んだのは9人だけだった。一方、子ども世代で親の介護が必要になった場合の対応は「自分が面倒をみる」20人、「家族と協力する」38人となり、子どもを中心に担う回答が半数を超えた。できれば介護を避けたいと答えたのも24

人多かった。奥西教授は「高齢者自身が1人暮らしのリスクや自分の介護をどうするかなどを考えて、家族と話し合う必要がある。地域コミュニティーの中でごく初期の段階で認知症などの変化に気付く仕組みも必要。かかりつけ医を通して、地域包括支援センターなどで専門的なアドバイスが受けられるようにすべきだ」と提言している。

近に高齢者が多く、メディアでもさまざまな問題が取り上げられており、介護の状況が想像しやすい」と指摘する。

その反面、「65歳以上でも仕事を続け、体力も衰えていない人が多く、自分が高齢者だと自覚する年齢は確実に上がっている。子ども世代も自分の親の老いを気付かなかつたり、認められなかつたりして、具体的なコミュニケーションにつながらないのではないかとみている。